

魏収の文学傾向について

矢嶋， 徹輔
九州大谷短期大学： 助教授

<https://doi.org/10.15017/9804>

出版情報：中国文学論集. 4, pp.34-44, 1974-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

魏収の文学傾向について

矢嶋 徹 輔

『魏書』の編纂責任者として歴史に名を残す魏収は若年よりすでに著名な文才の士と称せられ、温子昇・邢子才らと共に三才と号された文人である。

彼は、字を伯起、小字は仏助といい、北魏の正始二年（五〇六）、鉅鹿の下曲陽（河北省晋県）に生まれ、東魏・北齊と三代の王朝に仕え、北齊朝滅亡の六年前の武平三年（五七二）に卒した人である。彼の生まれた時代は、北朝に最初の文学隆盛の気運を將來した孝文帝の太和時代が終り、まだその余風の残る宣武帝の治世であった。しかし、帝を始め以後の歴代皇帝の仏教崇拜による国費の乱費はかえって国内経済の繁栄を促進する結果となり、西域からは種々の珍貨がもたらされ、王侯貴族や文人らの間に享樂主義的生活風潮が大いに風靡して国家の頹廢を招いた。この当時の有様は、北魏の楊銜之がその著作である『洛陽伽藍記』にて詳細に物語っている。一方、朝廷内部も胡・漢両貴族らによる陰湿な権力闘争の舞台と化し、ついに国家統制の秩序は乱れて各地に反乱が頻発した。この騒乱を鎮めて爾朱氏が抬頭するや、まもなく胡族系武人出身の高歡が山東地方

の漢族有力豪族や北辺守備の不遇をかこつていた胡族士人らの要請をになつて勢力の拡張を謀り、終に爾朱氏を逐つて、五三四年に北魏の宗室を帝位につけて国名を東魏と改めた。そして国都を洛陽から鄴（河南省臨漳県）に移した。その後、五五〇年に高歡の第三子洋が東魏の禪讓を受けて北齊朝を創めた。この王朝をささえる基盤は前述の如く山東省を中心とする土着の豪族の名声と財力、それに北辺守備の胡族士人らであつたので、初代天子文宣帝（高洋）は政策上、漢化主義を退け胡族優位の政策を實踐しようとしたが、文化的には当然漢族文人に主導権を握られ、政治の實踐理論はおのずから漢族の伝統的儒教理念に基づくものとならざるを得なかつた。このことは当然文学面にも大きな影響を与えることになつた。唐の李延寿は『北史』文苑伝に「太和・天保の間、洛陽・江左、文雅最も盛んなり。…河朔の詞義貞剛にして氣質を重んず」と記すが、まさにこの天保年間（五五〇～五五九）という文宣帝の治世の時には復古主義的文学風潮が再びクロウズアップされることになつたと考えられる。

けれども、天保の後半期に到ると文宣帝は暴虐の天子として名を馳せ、またたく間に儒教リゴリズムによる質実剛健の文学風潮は衰退した。その後三代目の天子孝昭帝は廢退的な風潮の刷新を試みたが、在位一年有余という短期間のために効果をあげ得ず、続く天子も暗愚で酒色におぼれ、その結果朝廷内部は血なまぐさい権力闘争に終始し、そのさ中に多くの有名な文人貴族らが犠牲となった。こうした情勢は国内にますます頹廢を將來した。又一方、天保八年(五五七)には南朝に陳王朝が成立し、北齊朝にとつては西魏との抗争上、陳との通好を謀つた。かくして、詞情艶麗な宮体詩を継承する陳の小詩や、典故と辞藻を重んずる南朝の浮艶なる駢儷文が北土にもたらされて隆盛し、五七七年に隋朝に滅ぼされるまでこうした文字風潮は国内を風靡したのである。

以上のような時代の推移のなかで、魏収は東魏朝より文人官僚として文学活動を行なつた。特に、『北史』文苑伝序に、
有奇、霸業広啓きてより、広く髦俊を延ぎ、四門を開きて以てこれを養き、八紘を頼めて以てこれを掩ひ、鄴都の下に煙霧霧集す。河間の邢子才、邢子明、鉅鹿の魏伯起・魏季景……並びにその流なり。

あるいは又、
河清(五六一五)・天統(五五六一五六九)の辰……李暹より已下、省に在りて、唯だ除官の詔旨を撰述するのみにして、その軍国に關涉する文翰は多く魏収これを作る。と記されているように、² 暹はすでに四十の半ばまでには円熟の境地に達し、北齊朝に於ける最も著名な文章家と称されるまで

になつてゐる。そこで、この小論は北齊にて活躍した魏収の文学傾向について考察を加えると共に、北齊朝文学の全般的風潮に少しくふれてみることを目的とするものである。

二

まず、最初に魏収の純文学面を中心とする全般的な文学傾向について、『北齊書』本伝など彼に關する伝記資料を通じて考察してみることにする。

魏収が父の任地である辺境で五年間の生活を終えて再び京都の洛陽に帰つた時はまだ二十才を少し越えたばかりの青年であつた。その頃の洛陽はすでに一章で前述した如く、国家の秩序は衰退の過程にあり、王侯貴族・仏教界を始めとして、国内は繁榮という美名のもとに頹廢的な歡樂の極みにあつた。辺境での質朴剛健の生活氣風を経験してきた若輩の魏収にとつてこの都の頹廢ぶりはまさに驚きとそして目をそむけたくなる有様であつたことであろう。この点について、後年、自ら編した『魏書』釈老志に、

正光(五二〇―五二六)已後、天下虞多く、王役尤も甚だし。

ここにおいて所在の編民、相ともに道に入り、假りに沙門を慕ひ、実は調役を避く。猥濫の極み、中国の佛法を有してより未だこれ有らざるなり。略そにして之を計れば、僧尼大衆二百萬なり。その寺三萬有餘、流弊歸まらざること一にここに至る。作者の歎息する所以なり。

と記している。この正光元年は収の十五才の時にあたり、まさにその当時の頹廢的な世相に対する青年魏収の慨歎の思いを回

願したものに外ならないであろう。

しかし、何事にも興味旺盛な年頃であり、いつしかときの社会風潮に染まっていたであろうことは想像に難くない。「北齊書」本伝に、

収、昔洛京に在りしとき、輕薄尤も甚だし。人号して「魏収蛺蝶を驚かす」と云ふ。

と記されているのは、まさにその頃の彼の彼の生活実態を証するものである。「蛺蝶」とは遊里の女を意味するものであり、そのような場所に出かけては大いに浮名を流したものであろう。このような当時の文人らの廃退的な風潮を記す資料は多々あるが、一例として同じく北齊朝の後半期宰相となつて一手に実権を掌握し、漢族貴族の頭目として朝廷内における漢族の勢力集中化をはかった祖珽（魏収と同僚の間柄であり、文林館の創設者）に関する話をあげてみよう。

自ら琵琶を解く弾じ、よく新曲を為る。城市の年少を招いて、歌舞を娛遊と爲し、これを倡家に集めて、陳元康……らと声色の遊びを爲す。（「北齊書」祖珽伝）

故に、こうした遊里で奏されるメロデーはおのずから新奇な耽美的なものとなり、その歌詞もいうまでもなく今様の艶麗な宮体詩的な作風であつたことであらう。かくの如き風潮のなかでは、当然又一般的傾向として北朝文人は南朝美文を盛んにもてはやしたと考えられる。そこで魏収も己れの生来の文才を大いに發揮したと思われる。

例えば、北魏最後の皇帝、孝武帝が国内の寒飢の様をも顧みず、嵩山の南で贅を尽くして狩を樂しみ、民衆の怨嗟の的とな

つた時、収は敢て「南狩賦」を詠み帝を諷したという。この賦は「富言淫麗といえども雅正に帰す」（本伝）と逆に帝に称されたという。帝の讚辞としてはあくまでも「雅正に帰す」と云わざるを得ないのであり、結局は「富言淫麗」と評されるところに彼の文学傾向の面目があらわされていると思われる。あるいは又、永熙三年（五三四）、二十九才となつた彼が梁の武帝のもとに使用した折、帝は魏収を「辞藻富逸」と称して讚美したといわれる（本伝）。この武帝の言辭はまさしく収の文章がきらびやかな修辭に富むものであり、南朝の作風に適つたものであつたといふことを証明したものと見えよう。さらに、帰国の途中で詠んだ「聘游賦」は「辞甚だ美盛なり」（本伝）と称されたという。又、天保八年（五五七）、文宣帝は新宮殿落成の祝典を記念して群臣に賦を詠ませた。この時、収が奉つた「皇居新殿台賦」は「その文甚だ壮麗たり、時に作る所の者邢邵より以下咸遠ばず」（本伝）と賞されている。あるいは、「北齊書」邢郭伝に、

濟陰の温子昇と文士の冠たり。世論じてこれを温・邢と謂ふ。鉅鹿の魏収、天才艶発たりと雖も年事二人の後に在り、故に子昇の死後、はじめて邢・魏と称せらる。

とある。収を「天才艶発」と評するのは彼がきわだつた文才の持ち主であると共にその文学も艶麗さに満ちたものであつたことを指摘しているのではないだろうか。

以上のような彼の文学傾向を端的に証する資料として、「北史」（卷三十三）李渾伝に次のような記述がある。

文宣、魏の麟趾格いまだ精しからざるを以て、渾と邢邵・

崔陵・魏収・王昕・李伯倫らに詔して修撰せしむ。嘗て魏収に謂ひて曰く、「彫蟲の小枝は、我れ卿に如かず、国典朝章、卿我れに如かず」と。

李渾は魏収が精緻な修辭を旨とする華美な文学創作に意を尽くしていたことを皮肉っているのである。

さて、それでは先述してきたような文学評価をなされた魏収自身の文学意識は一体いかなるものであつたであらうか。

この点について、「北齊書」本伝には、

邢邵（字は子才）又云ふ「江南の任昉は、文体もともと疎なるに、魏収直に模擬するのみにあらず、亦大いに偷竊す。」

収聞いて乃ち曰く「かれ常に沈約集中より賊をなすに、何ぞ意はん我れ任昉を偷むと道ふとは」任・沈俱に重名有り、邢・魏おのおの好む所有り。

という記述がある。南朝の最も著名な文章家任昉の文章をそっくり引用していると邢邵に非難されて、魏収はどうせ同じ穴のむちなじゃないかと反論しているのであるが、まさに南朝美文を全く肯定する意識そのものに外ならぬ、このことについては収を實際によく知っていたと考えられる顔之推も「家訓」文章篇中に、

邢子才・魏収、俱に重名有り、時俗の準的して師匠となす。

邢は沈約を賞服して任昉を軽んず。魏は任昉を愛慕して沈約を毀る。毎に談嚙において、辞色を以てし、鄴下紛紜して各々朋党有り。祖孝徴かつて吾に謂ひて曰く「任沈の是非は乃ち邢魏の優劣なり。」

と記している。

三

さて、以上によつて魏収の文学傾向は明らかに南朝の文学への志向性を有するものであつたことが論証された。そこで、次の作業として、彼の文学作品そのものがいかなる傾向を有していたかについて検討を加える必要がある。

まず、純文学作品として、二章で先述した魏収の賦は今日題名を残すのみで一篇すらも現存していないので、詩と樂府の韻文について考察してみることにする。

現存する魏収の作品は樂府が五篇、詩が八篇の計十三篇である。その中より幾篇かを次に掲げてみる。

永世楽

綺窗斜影入

上客酒須添

翠羽方開美

鉛華汗不霑

関門今可下

落珥不相嫌

綺窗に斜影入り

上客 酒 須らく添うべし

翠羽まさに美を開くも

鉛華 汗霑はず

門を関じて今下るべし

珥を落すも相嫌はず

（「樂府詩集」卷七五雜曲歌辭）

挾琴歌

春風宛転入曲房

兼送小苑百花香

白馬金鞍去未返

紅妝玉筋下成行

春風宛転として曲房に入り

兼ねて小苑に送る百花の香

白馬金鞍去りて未だ返らず

紅妝の玉筋下りて行を成す

(『心府詩集』卷八六雜歌謠辭)

「翠羽」・「鉛華」あるいは「紅妝」などの詩句は美人の形容であり、空閨を悲しむ女や女の舞い姿を描写したものである。

權歌行

雪溜添春浦

雪は溜れて春浦に添ひ

花水足新流

花水は新流を足たす

桃発武陵岸

桃は発く武陵の岸

柳拂武昌樓

柳は拂ふ武昌樓

(『樂府詩集』卷四〇相和歌辭)

これらの樂府はあるいは曲を付して遊里あたりで歌われるにふさわしい単なるリリズムを弄ぶ作に過ぎない。この外、「美女篇二首」などを挙げればもはや疑う余地なく南朝宮体詩風の作品であろう。又、八篇の詩にしても思想なき詩句の技巧のみが顕著に目立つものであるがこのように収の韻文方面に関する作品の傾向はあきらかに南朝詩の模倣に過ぎないということが可能であろう。

それでは次に、彼の散文に関する作品の傾向について検討してみよう。

すでに二章で述べた如く、顔之推は魏収が任昉を愛慕して沈約を誇ったということがこの点について、果して収が任昉の影響を受けているのかどうか、現存の数少ない彼の文章(『全北齊文』に十四篇が集録されている)をとりあげ、それを実際に任昉の文章と比較してみればおのずから明らかにすることができよう。

例えば、魏収の「冊命齊王九錫文」(『北齊書』文宣紀)と任昉の「策梁公九錫文」(『梁書』武帝紀上)とを比較してみる。

(a) 以王踐律蹈礼、軌物蒼生、四首安志、率心帰道、是以錫王。大路戎路各一、玄牡二駟。

以公礼律兼修、刊德備舉、哀矜折獄、罔不用情、是用錫公。

大略戎略各一、玄牡二駟。

(b) 王深重民天、唯本是務、衣食之用、榮辱所由、是用錫王。冤之服、赤舄副焉。

公勞心稼穡、念在人天、不崇本務、惟穀是宝、是用錫公。衾之服、赤舄副焉。

(c) 王深広恵和、易調風化、神祇旦格、功德可象、是用王。軒懸之案、六佾之舞。

公鎔鈞所被、変風以雅、易俗陶民、載和邦国、是用錫公。軒懸之案、六佾之舞。

その外また同文中の「是用錫王朱戸以居」・「是用錫王彤弓一彤矢百盧弓十盧矢千」などの語句は、「王」の字が「公」の字に代るだけで全く任昉の引用である。以上のごとく、この一篇の文章を比較しただけでもいかに収が南朝の有名な駢儷文の大家であった任昉の文章を模倣しているかがよく分かる。というよりも、収のこの文章の場合は模倣どころか邢邵のいう「大いに偷竊す」そのものである。そしてさらに文体についていえば力強い弾力性にとむ漢魏のそれではなく明らかに華靡な典型的南朝駢儷体である。

その他、収の「禪位冊」(『北齊書』文宣紀)という文章も任昉の「禪位梁王策」(『梁書』武帝紀上)の語句を所々にそのまま引用している。

以上、魏収と任昉との文章を二篇ほどとり上げて比較したの

みであるが、さらに詳細にその他の文章をそれぞれ検討すればその類似点を指摘できよう。とにかく、顔之推の言は魏収の文学傾向に対する的確な批評であつたと云える。又、司馬遷の「史記」・班固の「漢書」に始まる「自序」・「序伝」の体裁は数世紀をおいて沈約の「宋書」に至つて再び採用されている。

収が「魏書」に「序伝」を記しているのは、憶測をたくましくして云えば、司馬遷よりもむしろ直接沈約を意識していたのではないかと考えられなくもない。この点について、明の張溥は「漢魏六朝百三家集題辭注」にて、「魏特進集」を論評して

余謂へらく、伯起（収の字）の文体は、これを樂安（任昉）に得ることもとより多し。もし史才を問はば、隱侯（沈約）の宋書も亦その兄事なり。

と述べている。又、清の孫德謙も「六朝麗指」にて、
邢は沈に近く、魏はすなわち任に近し。

と評している。これらの記述などにより、まさしく魏収はその文章において任昉らの影響を深く受けた文人であるといえよう。又、収の死後約半世紀ばかり後に編纂された「隋書」文学列伝序に、

濟陽の江淹・吳郡の沈約・樂安の任昉・濟陰の温子昇・河間の邢子才・鉅鹿の魏伯起等、並びに学は書圖を窮め、思は人文を極む。縉采雲霞より鬱ふかんにして、逸響金石より振ふ。英華秀発し、波瀾浩蕩たり。筆に余力あり、詞に源の竭きること無し。

と記されているように、南朝の「齊」・「梁」の文学界に最も大きな影響力を有していた「沈」・「任」と比肩されて評さ

れている。過分の讃辞という点を除いたとしても、とにかく、これらの評価を通じて北齊朝を代表する文人魏収の文学傾向は疑いもなく修辭を旨とする南朝美文学の風潮を繼承するものであつたと指摘することができる。

四

以上のように、魏収は南朝の美文学の影響を十分に受けた文人であることを論証したのであるが、ただここで問題としなければならぬ疑問点がある。それは彼が儒教理念に基づく達意を旨とする漢魏の文学に内在する思想性を重視する文学論を「魏書」の文苑列伝序に記述していることである。

その序には次のように記されている。

それ、文の用たる、その来たるや日久しく、昔の聖達の作、賢哲の書より、理を統べ章を成し氣を蘊くわえ致を標めはさざる莫し。その流広く変り、もろもろ一貫するにあらず。文質推移し時と俱かに化する。淳于（髡）は齊に出でて雕竜の目あり。靈均（屈原）は楚を逐はれて嘉禍の章を著はす。漢の西京、馬（司馬相如）・楊（雄）首称たり。東都の下、班（固）・張（衡）雄伯たり。曹植はまことに魏世の英、陸機はすなはち晋朝の秀なり。時を同じくして並列すといえども、途を分けて遠きを争ふ。永嘉の後天下分崩し、夷狄交も馳せ文章殄滅す。

文中で、彼は古代の聖哲の文章は「莫不統理成章 蘊氣標致」と述べるが、これは古の聖人君子の文章は常に人倫の道を明らかにするためのもの、いわば文学の効用を道德実践の工具とな

す儒教理念に基づく遠慮主義的文学観と考えられる。さらに曹植、陸機など先代の代表的文人を列挙し、彼らを深く讚美している。つまり、収は時代の推移と共に文質もそれぞれ変化していくものであることを是認しつつも、なお彼らの文学が華麗なる文辞のなかにも風骨を内包するものであったということを述べているのであろうか。この点について、近人羅根沢は自著の『中国文学批評史』(二五二頁)で、「魏収主統理成章、与南朝の以情綺文、颯然背道而馳」と論じている。とすれば、二・三章で論述した如く南朝文学の影響を十分に受けていると考えられる魏収にこのような復古主義的文学論が存在するのは一体いかなる理由によるのであろうか。鈴木虎雄氏が『支那詩論史』(一一二頁)にて、収のこの「序」を「其詳を語るものにあらず」と述べられているように、これは文学論とは云えないかも知れないが、しかし彼の文学傾向を語るときには抹殺できないものでもあろう。

そこで、次にこの問題点について少しく考察してみることとする。

東魏の権力者高歡は北魏の宗室を擁立し、自らは晋陽に霸府を置き朝廷を監視するという変則的な政策をとり、かつ太和時代のような漢族伝統の儒教精神による強力な復古主義的政治体制を崩壊させた結果、頽廢的な南朝文学が隆盛したことをすでに拙稿にて論述した。しかし、高歡が武定四年(五四六)に病死すると長子の高澄は漢族貴族らの支持によって東魏の禪を受けるべき準備をととのえるために、従来頽廢的な国内風潮を大いに改革せんと志した。『北齊書』文襄(高澄)紀に、

正光(五二〇—五二五)より已後天下事多く、在任の群官廉潔なる者寡し。文襄乃ち吏部郎崔暹を奉じて御史中尉と為し、權豪を糾劾すること縦捨する所無し。ここにおいて風俗更始し私柱の路絶たる。乃ち街衢に旆し具に経國の政術を論じ、仍に直言の路を開く。論事の上書苦言切至なる者有らば、皆これを優容す。

と記されている。その効果はともあれとにかく伝統的儒教理念による国家統制の政策が採用され、天子も自ら儒学に志ぎすようになつたらしく、

靜帝(孝靜帝)顯陽殿において、李経・礼記を講じ、(李)絵、從弟の襄・裴伯莊・魏収・盧元明等らと俱に録議を為す。

と『北齊書』李絵伝は記述する。しかし、高澄は五四九年に暗殺され禪讓の企ては挫折したが、澄の弟の高洋が翌年五月ついに帝位に即き北齊朝を建国した。この高洋が文宣帝であり、彼は当然王朝の基盤を形成するために兄の遺風を受け継ぎ、復古主義的政策を實踐した。彼の政治綱領は「正風俗詔」・「詔有司」・「求直言詔」・「移漢石經詔」などの詔によつて知ることができる(いずれも『北齊書』文宣紀に見える)。文宣帝は酒乱の暴君として多くの臣を誅殺したことで有名であるがそれは在位十年の後半の期間であり、その前半は「初め大位に踐き心を政府に留め、法を以て下を馭め、公道を以て先と為す。あるいは憲章に違犯するもの有れば、密戚旧勳といえども必ず容舍する無し。内外清靖として祇爾せざる莫し。」(『北齊書』文宣紀)と称されるように自ら政治を裁決し、すぐれた治世を行なった皇帝である。北齊から隋にかけての著名な文人盧思道も「北齊興亡論」

（『文苑英華』巻七五二）中で「時政に霽倫あり、朝に俊乂多し」と記している。このように復古主義的思想に基づく国家の基盤形成に意を尽くさんとする文宣帝にとって文学に対する考えも当然従来の浮華な頹廢的風潮を改めようと意図しなければならなかったであろう。この点について、帝の意向を端的に示す資料として、「王昕削爵詔」（『北史』王憲附伝）があげられる。この詔は次のように記されている。

元景（名は昕）……好んで輕薄篇を詠み、自ら謂へらく儉楚（南朝をさす）を模擬し、風制を曲盡し、此れを推して長と為す。餘は何ぞ取るに足らんと。此れにして繩^{なづ}らずんば後まきにいづくにか齟^そめん。

これは名門貴族出身のこの当時最も著名な風流文人であった王昕が北土に流行していた南朝の宮体詩風の詩を好んで詠んだことに對する帝の非難である。ちなみに、南朝梁での宮体詩大流行の時期を考察してみると、だいたい、大同年間（五三二―五四五）を中心とする約二十年間のことであるといわれる。とすれば、ほぼ東魏末における宮体詩の流行は時期的にも合致している。つまり帝は王昕を罪することによって浮華な当時の文学風潮を刷新しようとしたのである。

以上のように、文宣帝の治世である天保年間の前半は復古主義的理念による国家統治が意図された。その結果、当然政界の中枢部にあつて要職を荷う文人官僚は立身・保身という現実的な処世の面をも含めつつ、かくの如き理念による政治秩序の達成に意を尽くすことになり、世俗の一般的風潮はともかくも、朝廷を取りまく官僚層の間には少なくとも頹廢的な時代風潮を

改めようとする傾向が顕著になつたと考えられよう。

例えば、この天保年間を中心に活躍した文人を列挙してみると、まず顔之推に名宰相と賞讃された楊愔は「愔は名家にして、徳盛んなり。……楊氏は儒生たり」（『北齊書』楊愔伝）といわれる。又、之推に儒者と称された晩年の邢子才、「詞韻温雅」（『北齊書』崔暉伝）と称される崔暉、あるいは又、性質が実直で、莊子や易の注釈をし、仏教にも造詣の深かつた杜弼（『北齊書』杜弼伝）子の台卿、五経の大義に通じ邢子才に賞された陸印（『北齊書』陸印伝）又、陶潜集に序を記したという陽休之は「文章華靡ならざるといへども亦典正たり」（『北齊書』陽休之伝）と称されている。顔之推も「家訓」慕賢篇で「文宣帝が在位数年後、飲酒におぼれて放縱に流れ規律ある政治は皆無となつた」と述べるように天保の初期はあきらかに復古主義的な政策が実践されたのである。かくして「天保の世、魏侯時に遇せられること甚だ深し」（『北史』陽休之伝）と云われる如く、文宣帝に寵愛された魏収は經史に通じていた祖父の感化を受けて幼少の頃より身につけた儒学的学識を十分に發揮した。「魏書」の完成が天保五年（五四四）のことであり、その「文苑列伝序」に記す復古主義的文学論はまさに天保年間という時代背景があつたからこそ吐露されたのではなかつただらうか。

五

以上、二・三章及び四章にて魏収の文学傾向について相反する二つの見解を論述した。

それでは、彼の意識に内在する文学そのものの考え方は、こ

の両見解のどちらに重点が置かれていたと考えるべきなのであるうか。

彼の復古主義的文学観を表明した資料は「魏書」の「文苑列伝序」が唯一の現存するものであり、特に、この文章が、北斉建国の儒教理念による文宣帝の政策が強力に実践された天保年間の前半期に書かれていることに注目したい。というのは、北斉朝を全般的に鳥瞰してみると、「推誠体道」と称せられた名宰相楊愔によつて、ともかくも「主昏於上、政清於下」といわれる如く政綱をひきしめられた天保年代を除いては、儒教理念による統治が実践されるにはあまりにも歴代天子が凡庸で放縦に流れ、その結果、朝廷内は複雑な権力闘争の渦中にあつたこと、それ故に、経学に造詣の深い文人官僚も政治の実践思想としてその学識を實際に活用する機会が乏しかつた。故に当時の風潮として経学は専ら文人が文人たるべき權威の象徴として学ばれるものであり、実用をはなれた単なる教養的学問となりさがつていた。否、教養としての学問ならばまだしも、顔之推は「家訓」勉学篇で、経学を学ぶ当時の文人らを「今、勤無益之事、恐非業也」とさえ云つている。かくの如き時代風潮を反映して、「収、碩学大才、然れども性褊く、命を達し道を体するあたはず。当塗の貴遊に見ゆる毎に顔色を以て相悦ぶ。」（「北史」魏収伝）といわれる、いわば現実的処世にたけた魏収の復古主義的文学論は専ら己れの才学誇示のためと時の風潮に迎合する立身の処世観に裏付けされたものと考えられまいだらうか。この点について東魏の末、高澄から「朝に今魏収有り。便ちこれ国の光采たり、雅俗の文墨通達縦横たり」（「北齊書」本伝）と称されたというが、

「雅俗」の両面にわたる文才を十分に揮つたというところに、収の文学面における節操の無さが示されている。又、文中でいう「雅」とは復古主義的思想を内包する文学というより、むしろ経学に関する博識さが充分に吐露されている文学を指摘したものと考えられなくもない。

彼が「文苑列伝序」で述べる復古主義的文学理念が彼自身の純文学面に反映している部分は現存の作品に見るかぎり、事実明らかにかつ乏しいと断言できるようである。

結局、魏収の文学傾向はやはり梁・陳を中心とする南朝美学を肯定するものであつた。このことを裏面からいへば、当時の北土における文学風潮が南朝の宮体詩的な小詩を核とする、修辭的な文章を憧憬し、かつそうした艶麗なる文章を弄する文人をもてはやすという情況にあつた。顔之推が言及しているように（二章）、魏収と邢子才が互に沈約・任昉の優劣を論じ合い、ついに京師において党派をなして論戦するまでになつたというエピソードなどはまさにこの事を証するものである。

ところで、三才と号された魏収・温子昇・邢子才は、いずれも南朝文学を十分に模倣した文人であるが、ただ魏収が他の二人と異つている点がある。それは、「収：温子昇、全く賦を作らず、形（子才）一兩首ありといへども、又長ずるところにあらざるを以て、常に云わく、会ず須らく賦を作りて始めて大才士と成るべしと。」（「北齊書」本伝）と記されているように、収が辞賦という純文学形式の作品を特に重視している点である。この理由について次のようなことが考えられる。

「収もと文才を以て必ず穎脱して知られんことを望む」（「

北齊書』本伝)と述べられているように、彼は文章の才能によつて榮達することに異常な執念を抱いていたらしい。例えば『魏書』の編集にあたり、協力者に史才無き人物を選び大部分独力で完成させたことなどその事を証明する。収が『魏書』の文苑列伝序にて、司馬相如・楊雄や陸機ら古の賦の大家を非常に賞讃していることなどから、彼自身己れの才と博識を十分に誇示するためには純文学面において何よりも賦という作品形式が最も適したものと考へたのではないだろうか。確かに、前述したように、彼の「本伝」によると美辞に富んだ賦を作り時の稱するところとなつたと記されている。唐の李延寿が「北史」魏収伝に

学は今古に博く、才は縦横を極む。体物の富尤も富贍たり。以て相如の室に入り尼父の門に遊ぶに足る。

と記すのは、まさしく収が辞賦作家としてすぐれた文人であつたことを指摘しているのであろう。とすれば、彼は何故に辞賦という文学を特に重要視したのであろうか。

この点を裏面からいえば、収は叙情的な短詩型文学の製作をあまり得意とする文人ではなかつたのではないだろうか。たとへば、顔之推の「家訓」文章篇に次のような話が記されている。王籍の「若耶溪に入るの詩」に云わく「蟬噪ぎて林愈静かに、鳥は鳴きて山更に深し」。江南以て文外断絶と為し、物に異議無し。簡文吟詠してこれを忘るあたはず。孝元諷味して以て復び得べからずと為す。……范陽の盧詢祖は、鄴下の才俊なり。及ち言う「これ語を成さず、何ぞ能を事とせんや。」魏収亦その論を然りと為す。

梁の簡文帝や元帝が評価し、世間でも秀作と認められていた王籍の詩の微妙な情感を北齊朝の著名な文人らは理解できなかったということを之推は暗に皮肉っているのであろう。勿論、梁朝文学の洗練された美意識の影響を受けて青年期を過ごした之推と北朝の文人とは詩的感覚の相異が存在することは確かに考慮しなければなるまい。とはいへ、之推の指摘は、はからずも魏収の情感面における欠如を証明するものといえよう。この点について、例えば邢子才の作品と比較してみれば明らかに収の作品は劣っているようである。もつとも現存の作品がきわめて少数である故このように断定することは早計であるかも知れぬが。

結局、鐘嶸が「詩品」にて「彦昇少年より詩を為るに工ならず、故に世は沈詩任筆と稱す」と評しているように、韻文より散文に特異な文才を発揮した任昉の文章を魏収は実際に賞讃し、かつ模倣している点から推察して、収は詩人というよりも、辞賦作家であり、特に文章製作に文才を揮つた文人であるといえる。

つまり、魏収は天才型の文人というよりも努力して広汎な知識を身につけ、散文作家たるを自負する博学な文人と思われる。彼が碩学と称されるのもこの点に起因するのではないだろうか。さて、天保も後半期に入ると、例えば、天保八年(五五七)に任城王湝(高歡の第七子)が「北齊書」の編者李延寿の父徳林を「秀才として時の宰相楊愔に推挙した時、その推薦文中で「彫蟲の小枝は、相如・子雲の輩に殆し」(『隋書』李徳林伝)と記すように、すでに前半期の復古主義的刷新の気風はもろくも消えさつている。その後、三代目の孝昭帝が五六一

年に即位して再び浮華な風潮を改めようとしたが、在位一年有
余で没し、次の武帝（五六二―五六五）は酒におぼれて政をかえりみ
ず、最後の天子後主（五六五―五六七）も「初め屏風に画くにより
通直郎蕭放及び晋陵王孝式に勅して、古賢烈士及び近代輕艶の
諸詩を録して以て図画に充てしむ。帝ますますこれを重んず。」
〔北史・文苑伝序〕といわれるように宮体詩風の艶情詩を好んだ
天子であった。このように朝廷の文風はそれを取りまく文人官
僚に強く影響を与え、この結果、北斉朝の文人らは南朝美文学
の模倣に追従し、質実剛健の素朴な文学はもはや見るべきもな
かった。魏収の文学もこのような時代風潮の中で形成され、北
朝末期における有数の駢儷作家として名を馳せたのである。

清の孫徳謙は「六朝麗指」に、

もし文に就いて言へば、北人魏伯起（名は収）・温鵬舉（名
は子昇）の輩の如きは未だかつて華貴ならざるはなし。然れ
ども猶ほ質重を傷ふを免れず。南人の簡練にして軽清なる
に及ばず。

と記しているが、これは魏収の文章が南朝的な華麗なる文辞を
有するものであったことを述べると共に、その内容面において
は南人に劣っていることを指摘したものであろう。つまり、模
倣者は結局模倣者にすぎず、任昉を模倣しそして任昉を超越で
きなかつたところに魏収の文人としての限界があつたのではな
からうか。

註

- (1) 拙稿「北魏・孝文帝の文学観」(九州中国学会報「卷十六」)
(2) 自武定二年已後、国家大事詔命、軍国文詞、皆収所作。(北齊書

書「魏収伝」

始収与温子昇、邢邵稍為後進、邵既被疎出、子昇以
罪幽死、収遂大被任用、独歩一時。(同前)

- (3) 拙稿「魏収の人物について」(「国語研究」二号「九州大谷短大」)
(4) 拙稿「東魏の文学思潮」―温子昇の文学を通じて―(中国文学論
集「第三号」「九大」)

- (5) (天保)六・七年後、以功業自矜、遂留連沈湎、肆行淫暴。(北
北齊書「文宣紀」)

- (6) 典膳宏氏「艶詩の形成と沈約」(「日本中国学会報」第二十四集)
(7) 字都宮清吉氏訳「顔氏家訓」による。(「中国古典文学大系」9・
平凡社)

- (8) 谷川道雄氏「隋唐帝国形成史論」二七四頁(筑摩書房刊)
(9) 人不可無学、但要不為博士耳。故讀書頗知梗槩、而不甚執習。(北
北齊書「上党剛肅王浚伝」)

- (10) 其史三十五例、二十五序、九十四論、前後二表一啓、皆独出於収。
収所引史官、恐其陵逼、唯取学流：房延祐、辛元植並非史才、刁
柔裴昂之以儒業見知、全不堪編撰。(北齊書「魏収伝」)

- (11) 収年十五頗已属文。及隨父赴邺、好習騎射、欲以武芸自達。榮陽鄭
伯、調之曰「魏郎弄戟多少」、収愠遂折節讀書、夏月坐板床、隨樹
陰、風竊積年、板床為之銳減、而精力不輟、以文華顯。(同前)

- (12) 温子昇較後者則有邢邵・魏収二人。諸人所作、類擬南朝、鮮見自
立。(鄭振鐸「插图本中国文学史」二六二頁)

(追記)

本稿は昭和四十八年度、文部省科学助成による「中国駢文の性
格とその史的考察」の研究報告の一部である。